
カナタの幻想外伝 三笠の追憶～皇國ノ興廃此ノ一戦ニアリ～

霜月龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カナタの幻想外伝 三笠の追憶〜皇國ノ興廢此ノ一戦ニアリ〜

【Nコード】

N9396F

【作者名】

霜月龍牙

【あらすじ】

物語は本編の主人公である山城彼方が空母『瑞鶴』に乗艦する四ヶ月ほど前の五月三十日。日露戦争の英雄である東郷提督が亡くなってちょうど七年たった日、戦艦『三笠』の艦魂である三笠は一人で自艦の露天艦橋に立っていた。彼女は古い写真を見て遠い過去を追憶する
《現在休止中》

プロローグ

昭和16年5月30日 横須賀三笠公園

ここには戦艦『三笠』が記念艦として保存されている。

『三笠』は日露戦争で最大の海戦である日本海海戦のときの連合艦隊の旗艦であり、今なお『軍神』として讃えられる『東郷平八郎』提督が座乗した艦である。

その『三笠』の露天艦橋には一人の金髪の少女が立っていた。彼女は、軍艦の化身のようなものである『艦魂』である。

「そつか 今日には平ちゃんの七回忌か」
「そう呟いて艦魂の少女 三笠は空を見る。」

しばらくそうしていた後、三笠は懐から一枚の古い写真を取り出した。

「平ちゃん あれからもう30年以上経っちゃったんだね。『敷島』姉さんや『鹿島』や『香取』も解体されちゃったわ。そして、今や帝國はロシアじゃなくてアメリカと戦おうとしている

ふふふつ、不思議だね。

こんなに時間が過ぎてもあの日々の事が昨日の事のように思い出せるよ。

平ちゃん わたし、うまくやれてるよね？

もう、あの頃のわたしみたいな失敗はしてないよね？

平ちゃん 「

三笠はそう写真の男に語りかける。

海軍の制服を着ており、首に双眼鏡をかけているその男は、三笠とおぼしき少女に抱き着かれ苦笑していた。
その写真には男や三笠の他にも、たくさんの金髪の少女たちが笑顔で写っていた。

三笠はそれを見てふいに過去を思い出す。

それは彼女が日本にやってくる少し前の事

プロローグ（後書き）

霜月「どうも、霜月龍牙です。ようやく 本当によやく外伝を上げました。」

三笠「さっすが作者！あんたはえらいよ！」

霜月「実は本編に詰まったから外伝考えて逃避したなんて 言えないよな。」

宝鶴「声に出てるわよ。」

三笠「そんなことどうでもいいわ。それより一話の登場人物がわたしだけって夢のようだわ！」

霜月「まったく、外伝書く前は文句ばかり言ってたくせに」

三笠「なんか言った、って本当は怒るところだけど、外伝書いてくれたから許してあげる」

宝鶴「それにしても本編と掛け持ちしたら両方更新が遅くなるんじゃないかしら？」

三笠「そこは ねえ、作者だし？」

霜月「うぐっ、言い返せないのが悔しい」

宝鶴「ところで平ちゃんって誰なの？」

霜月「いや、それは次回のお楽しみと言っことで。」

三笠「ヒントは双眼鏡よ。」

宝鶴「えっ！？あの人を平ちゃん呼ばわりしちゃってもいいんですか！？」

三笠「別に、平ちゃんは平ちゃんだもん。」

霜月「答えが分からなかった方は次章を期待してください！分かった方も次章を楽しみにしてください！」

宝鶴「更新のメドは立ってないけどね。」

三笠「ご意見・感想待ってます。」

第一章「三笠、来日」（前書き）

どうも、霜月龍牙です。

本編の方がまったくアイディアが浮かばないので、しばらくはこちらの方を更新します。

本編を期待されている方は申し訳ございませんがしばらくお待ちください。

あと、念のため言っておきますが、これは架空戦記ですので『忠実と違うじゃないか』と言われても作者は対応できません。

さらに、忠実と同じ名前の人物が多数出ると思いますが、作者は物語性を重視し、性格やその他人物設定を変更しております。

そのところをご了承ください。

第一章「三笠、来日」

1902年5月。

その港には『敷島』級戦艦や『出雲』級装甲巡洋艦など、当時の日本主力艦が停泊していた。

ここは八年前の日清戦争時に連合艦隊の殆どの艦が停泊していたところであり、ロシアとの関係が悪化している現在は、以前にも増して重要な軍港となっている。

そう、ここは広島県にある大日本帝國随一の軍港、呉港である。

現在、イギリスで建造された大日本帝國の最新鋭戦艦である『三笠』はその呉港に向かっていた。

「うつつ、緊張するな。わたしのお姉ちゃんってどんな人なんだろう。」

『三笠』の露天に立っている金髪の軍服を着た少女がそう呟く。

彼女は『三笠』の艦魂である。

「もうすぐ、呉だね。覚悟を決めてなきゃ。」

そう言つて三笠は自分の頬を両手でびしゃりと叩く。

「行くわよ、三笠。」

彼女はそう呟いて光の粒となって消えた。

一方、呉港に停泊している戦艦『敷島』の艦上には、多くの士官服や下士官服、水兵服を着た少女たちが今日やって来る新鋭戦艦の『

三笠』について話していた。

「ああ、早くわたしの妹が来ないかな。」

そわそわしながら呟くのは、『敷島』級戦艦の三番艦である『初瀬』の艦魂である。

彼女を含め、戦艦の艦魂はみな士官服を着用している。

ちなみに、装甲巡洋艦と防護巡洋艦は下士官服を、駆逐艦や水雷艇は水兵服を着用している。

「なに、初瀬ったら緊張しているの？」

「ね、姉さん、違うわよ。」

初瀬はそう言って彼女の姉 敷島姉妹の次女である朝日を睨む。だが、彼女がやると全く迫力が無い上にとっても可愛いので、朝日はそれ以上からかうことはできなかった。

「ふふふつ、朝日も何だかんだ言って結構楽しみにしてたじゃないのよ。」

「ええっ！？まあ、そうだけどさ。姉さんは楽しみじゃないの？」

「あら、わたしはとても楽しみよ。だって妹が増えるんですもの。」

そう言って微笑むのは、二人の姉である『敷島』の艦魂である。

彼女は現在、常備艦隊の長官で、この国の艦魂社会のトップである。

「三笠に会った瞬間に鼻血噴いて気絶しないでよ。こっちが恥ずかしいから。」

朝日は困ったように言う。

敷島は可愛い物を見ると鼻血が出てしまい、下手をすると気絶してしまふ癖（？）がある。

初瀬が初めて日本に来たときも、敷島は鼻血を噴いて気絶してしまったのだ。

今は慣れたのでなんともないが、敷島はしばらく初瀬と会ったたびに鼻血を噴くことになった。

ちなみに、朝日の時はなんともなかったのだが

「だいじょうぶよ。だって三笠は妹じゃない。」

「本当かなあ？初瀬の時だって鼻血を噴いたじゃない。っていうか、何であたしときは噴かなかったのよ！」

三人がそんなやり取りをしていると彼女の近くの空間が光りだした。

「うつつ、緊張するな。」

「いよいよだね。」

光は一段と強くなり、やがてその中から一人の少女が姿を現した。

「あつ、あのつ、初めましてっ！わたしは『三笠』の艦魂の三笠ですっ！

これからよろしくお願いしますっ！」

そう言つて三笠は力チ力チになりながら彼女の姉たちに敬礼をする。そのとき、周りの艦魂たちから一斉に拍手や歓声が沸き起こる。

「三笠、そんなに堅くなくていいわよ。
それと、はじめまして。わたしはあなたの姉の敷島よ。」

「わたしは、朝日よ。よろしく、三笠っ！」

「えと、わたしは初瀬です。よろしくね、三笠。」

そう言って敷島と朝日は微笑んで、初瀬は少し緊張しながら自己紹介を終えた。

「うん　　よろしくっ、お姉ちゃんっ！」

三笠は感極まったのか、涙を浮かべながら満面の笑顔を浮かべて言う。

《かつ、可愛い　　》

そのあまりの可愛さに三笠の姉たち三人を含め周りの艦魂は、思わず胸がキュン、となる。

敷島はすでに鼻血が垂れ始めている。

「ん？どうしたの、お姉ちゃん？」

三笠はそう言って顎に指を当てて首を傾げる。
まさに反則的な可愛さだ。

ブッシュウウウ！

『姉（敷島）さんっ！？』

「お姉ちゃん!？」

敷島は三笠のあまりの可愛さに耐え切れなくなって、ついに鼻血を噴きだして倒れてしまった。

慌てて艦魂たちが駆け寄ると、敷島は鼻血をドクドク噴き出しながら目を回して気絶していた。

「えっ、えっ!？敷島お姉ちゃんどうしたの!？」

三笠はそう言っておろおろする。

「（はう、可愛い　って、だめよっ!わたしはあの子の姉なんだからっ!）」

えっとね、姉さんは可愛い物を見ると鼻血を噴いて、下手をすると気絶しちゃうんだよ。」

初瀬は必死に己の欲望（?）と戦いながら三笠に説明する。

幸か不幸か、朝日は敷島の介抱をしているので三笠の方を見る余裕はない。

「えっ、そうなの?でもいったい何を見たんだろ?」

そう言つて三笠はまた首をかしげる。

《だからそれがダメなんだって!！　でも、可愛いから許す!！》

こうして三笠は帝國海軍のアイドルとなり、後に世界規模になる彼女の非公式ファンクラブもこの時に結成されたのであった。

第一章「三笠、来日」（後書き）

霜月「ようやくこの物語も始まりました。連載中止という事態にならないよう努力いたします。」

??「そういえば作者って日露戦争は詳しくないんじゃないかなかったっけ？」

霜月「うぐつ、僕は第二次世界大戦専門ですから正直日露は基礎的な事しか知らないんです。」

??「はあ、全く。よくこんなので書こうと思いましたね。」

霜月「面目ないです　　というかそろそろ名前明かしませんか？」

朝日「それもそうね。」

敷島「わかりましたわ。」

霜月「あれ、初瀬と三笠は？」

朝日「三笠は姉さんが気絶するからダメだって。初瀬は呼んだんだけど恥ずかしくて逃げちゃったわ。」

霜月「敷島さんっ、鼻血垂れてる！」

敷島「あら、本当。早くこの癖が直ってほしいですわ。」

朝日「そういえば、どうしてあたしの時だけ　　」

霜月「さて、次回はいきなり飛びますが、連合艦隊が編成されます。

」

敷島「ご意見・感想をお待ちしております。」

第二章「大波乱！？三笠の歓迎会」（前書き）

《登場人物紹介》

「敷島」

年齢

2歳（1902年7月1日現在）

誕生日

1月26日

身長

168cm

体重

内緒です

出身国

イギリス

妹が三人おり、おとなしい性格。

可愛い子を見ると鼻血が出てきて、ひどい時だと鼻血を勢いよく噴出して気絶するという困った癖（？）がある。

好きなものは茶道で、嫌いなのは可愛い子を見ると鼻血を出してしまう自分の癖。

「朝日」

年齢

1歳（1902年7月1日現在）

誕生日

7月31日

身長

174cm

体重

秘密に決まってるでしょ！

出身国

イギリス

敷島姉妹の次女。

サバサバした性格だが、頭のほうはいまいち。

歯に衣着せない物言いのせいでたびたび争いごとを呼び込むが、初瀬の仲介のおかげで仲直りができている。

好きなものは運動で、ウジウジしている奴や努力しない奴が嫌い。

「初瀬」

年齢

1歳（1902年7月1日現在）

誕生日

1月18日

身長

158cm

体重

ひつ、秘密です！

出身国

イギリス

敷島姉妹の三女。

個性的すぎる姉や妹のせいでいつも騒動に巻き込まれる苦勞人。

好きな物は絵本を読むことで、苦手なのは先輩の八島と姉妹たちが巻き起こす騒動。

「三笠」

年齢

0歳（1902年7月1日現在）

誕生日

3月1日

身長

148cm

体重

ないしょ♪

出身国

イギリス

敷島姉妹の四女。

天真爛漫な性格と超絶的に可愛い容姿のために皆から愛されており、非公式ながらファンクラブも存在する。

また彼女専属の親衛隊（彼女は一切その存在を知らない）が存在し、彼女を影から守っている。

好きなものは三人の姉と甘いもの。

暴力と戦争が苦手。

第二章「大波乱！？三笠の歓迎会」

三笠が呉に到着した夜、『敷島』の作戦会議室は呉の艦魂たちによって占拠されていた。

机の上には兵棋演習用の地図や駒に代わって料理やお酒が並べられ、壁には『祝軍艦三笠就役』の横断幕が張られていた。これから彼女たちは三笠の歓迎会をやるうというのである。

「軍艦三笠の就役と我々の新しい仲間乾杯！」

『かんぱーい！』

敷島の声に合わせて艦魂たちはグラスを鳴らす。

「ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ ふはあーくっ、やっぱりこれだよー！」

朝日は日本酒のビンに直接口をつけて豪快に飲む。

「朝日姉さん、それはオヤジ臭いよー」

「まあ、いいじゃん。誰も見てないんだし。」

初瀬は女らしさがゼロな姉を諷めるが、朝日はまったく初瀬の話を聞こうともしない。

「まったくもう それにしても、三笠はそんなに飲んで大丈夫なの？」

初瀬は今度は妹の心配をする。

彼女にとって三笠は、出会ってすぐに敷島を撃沈したり、姉であるはずの自分が思わずドキッとさせられたりと、色々な意味で朝日に次ぐほどの悩みの種となっている。

姉である敷島は用事があるためにすぐに帰ってしまったので、それについては大丈夫であるが、今度は新たな問題が浮上しようとしていた。

三笠が大の酒豪である事である。

彼女は歓迎会の開始から5分の間に、日本酒を三本とビールを2本飲み干しており、さらに彼女の周りにはまだ開けてないビンが10本以上立っていた。

「うん、全然余裕だよ。本当ならあと十本くらい飲むけど今日はちよつとセーブしたいから。」

そう言つて三笠は再び日本酒を飲み始める。

（それってセーブって言わないんじゃない）

初瀬はそう思つたが、彼女はあえて口には出さなかった。

「 幼女のくせに大酒豪。」

「それは東。だよ　　つて、磐手じゃない。」

初瀬が『磐手』と呼んだのは、下士官服を着た少女であつた。

彼女は、装甲巡洋艦『磐手』の艦魂であり、かなりの問題児である。

「　　つるぺったん？」

本来なら上官のはずの初瀬に向かって平気でタメ口をきき、さらに時々よく分からない台詞を唐突に言うことがある。

「なっ、何いつてるのかわからないよ」

思わず初瀬は後ずさる。

「もう、磐手っ！また上官に変なこと言ってるの？」

そう言っつて磐手に怒るのは、彼女の姉の出雲だ。

彼女は瓶底メガネに三編みといった、いかにも委員長といった感じの子である。

「何か用？」

磐手は姉の言葉をさらっと受け流す。

「『何か用？』じゃないわよまったく！

あんなだけ上官にはタメ口きくなつて言つたのに！

この前だつて《以下略》つて注意したばかりじゃないの！

はあ、はあ、はあ あーもう！ム力つくわよ、この愚妹が！」

出雲は今にも磐手に向かって殴りかかろうとする勢いである。

初瀬はそれを見ておろおろしている。

「まあまあ、これ飲んで落ち着きなよ。」

磐手はそう言っつて艦魂の力で具現化した、水の入ったコップを差し出した。

「ん、ありがとう　ゴクツ　ゴクツ　あゝおいしかった、じゃないわよっ！」

出雲は空になったコップを地面にたたきつける。
ガラスのコップは見事に割れるが、艦魂の力で具現化しているためにすぐに消えてしまう。

「　ぐっじよぶ。吉○顔負けの見事なノリツッコミだったね。」

磐手はそう言って出雲にサムアップをする。
彼女はしてやったり、といった顔をしている。

「そうじゃないでしょ！まったくあんたって奴は！」

「あの　出雲。わたしは別にいいんだけど　」

出雲がさらにヒートアップしそうな勢いなので、初瀬が矛を収めさせようとする。

だが、逆にそれが出雲の怒りの矛先を彼女に向けることになってしまった。

「別にいいとはなんですかまったく。初瀬さんも初瀬さんですよ！　そうやって甘やかすからこいつが付け上がるんです！」

普段から思っていました、あなたは上官としての立場をもっと

「

出雲は完全に頭に血が上っているのか、階級が上のはずの初瀬に向かって説教を始める。

「はい、すみません」

そして、なぜか初瀬は階級が下のはずの出雲に対して謝っている。

「姉さん、抗命罪と上官侮辱で軍紀違反。」

磐手はニヤリとしながら姉の失態を指摘する。

「なッ あっ、あんたって奴は ！」

「まあまあ、二人ともけんかはよくないアル。
それでも食べて気持ちを落ち着かせるネ。」

「えっ、ちよっ もがっ！」

「むごっ！」

突然現れたチャイナ服を着た少女は出雲と磐手の口に無理矢理シューマイを突っ込んだ。

二人は口に突っ込まれたシューマイを思わず飲み込む。

「鎮遠さん！」

初瀬が救いの神が現れたかのような顔をする。

チャイナ服を着た少女 鎮遠は元々清国海軍の軍艦で、日清戦

争最大の海戦である黄海海戦を戦った後に威海衛沖で座礁し、日本軍に鹵獲されて連合艦隊に編入された艦である。

彼女は中華料理が大の得意で、艦魂の間では「料理長」と呼ばれている。

「これで二人は仲直リアルネ」

鎮遠は初瀬に微笑む。

「磐手　ごめんなさい。わたしがきつく言いすぎたわ。」

「うん、そんなことない。姉さんは悪くない。悪いのはわたし。」

先ほどまであれ程怒っていた出雲が急にしおらしくなり、磐手は素直になってしまった。

「ねえ　両方悪かったってことで仲直りしようか。」

「うん、そうだね。姉さん。」

「磐手　」

「姉さん　」

二人は見つめあったまま、次第に互いの顔を近づけていく。

「うんうん、これで一件落着アルネ。」

「ほっ　一時はどうなるかと思いました。」

二人は安心したような顔をする。

「でもさ、なんか雰囲気やバくない？」

「朝日、そんなことはどうでもいいアル。それより、朝日や初瀬もシューマイ食べるアルか？」

鎮遠は朝日を感じた疑問を一蹴し、自分の料理を勧める。

「えっ、いいんですか？」

「おっ、いいんですか？」

「もちろんアル。わたしは皆に料理を食べてもらうことが幸せアル。」

鎮遠はそう言つて屈託のない笑みを浮かべる。

「あつ、ありがとうございます。では、お言葉に甘えて。」

「いただきまーっす！」

「うん、どんどん食べるアル。」

二人は早速、鎮遠の作ったシューマイを食べ始める。

鎮遠は二人がシューマイを食べるのを、本当にうれしそうに見ている。

「おいしい！」

「うん、さすが鎮遠さんだ！」

二人は感嘆の声をあげながら、あつという間に鎮遠の用意したシューマイを平らげる。

ちなみに、鎮遠は連合艦隊一の中華料理の腕を持っており、この歓迎会の料理のほとんどを彼女が作っている。

「もつと食べてもいいですか？」

「もちろんアル。どんどん食うネ！」

（数分後）

「お姉ちゃん」

「初瀬」

朝日と初瀬はお互いに顔を真つ赤にしながら見つめ合っていた。

二人の目はトロンと濁っており、心なしに段々顔が近づいている様にも見える。

「うんうん、仲がいいことは良い事ネ。さて、シューマイを補充するアルか　あれ？」

こっ、胡椒の瓶が惚れ薬の瓶に入れ替わってるネ！？」

鎮遠は慌てて周りを見渡してみると、先程はシューマイを食べさせるのに夢中で気付かなかったが、既に何人もの艦魂が『出来上がっている』状態になっていた。

「　　たっ、多分わたしがやったってバレてないアルよ　　ね。
まっ、まあ、仲がいい事は良い事ネ　　（汗）」

鎮遠は冷や汗を滝のように流しながらその場から逃げるように立ち去った。

「あゝ、飲んだ飲んだ。みんなはどうしたのかな？」

自分の周りにある酒を全て飲み終わった三笠は、顔を上げて周りを見てみると、そこには鎮遠のシューマイを食べた艦魂たちが、到底この場では言えないような光景を繰り広げていた。

「きゃあ！」

三笠は思わず目を閉じる。

（いまのは酔っちゃったせいで見えた幻影だよね？
そつだよ、栄光ある大日本帝國の艦魂がそんなことする訳ないよね？
ほらっ、三笠。今のは幻だから早く目を開けるのよ。）

三笠はそう自分を奮い立たせて、恐る恐る目を開ける。
すると、三笠の目には先程と同じ光景が写った。

「ひっ！」

三笠は再び目をつむる。
今度は夢を見ているという可能性に思い至った彼女は、夢かどうかを確かめるために自分の頬を思いきりつねってみる。

「あうゝ、いたいよゝ」

三笠は痛さのあまりに自分の頬を押さえるのと同時に、これが夢ではないことをはっきり認識した。

三笠はまた恐る恐る目を開けてみると、艦魂たちの状況はさらに悪化していた。

具体的には《検閲により削除》が《検閲により（略）》になっており、さらに《検閲（略）》が《検（略）》で大変なことになっていたのだ。

三笠はまたすぐに顔を手で覆うが、好奇心には勝てないのかやがて顔を真っ赤にしながら指の間からチラチラと周りを見始める。

「おっ、女の子同士であんなことを　　ええっ！？そっ、そんなことまで！？」

三笠がその光景に魅入っていると、唐突に会議室のドアが開いた。

「みんな、楽しんで　　」

ブッシュウウウ！

用事が終わった敷島は、ドアを開けて中で繰り広げられている桃色の光景を見た瞬間、彼女は鼻血を盛大に噴き出しながら気絶してしまった。

だが、三笠はそんな姉の緊急事態に気付かずに、目の前の光景を食い入る様に見つめている。

そして、三笠は艦魂たちの惚れ薬の効果が切れるまでずっとそのまま見ていたのであった。

翌日、艦魂たちの関係がぎこちなくなっただけの言っただけでもない

第二章「大波乱！？三笠の歓迎会」（後書き）

霜月「どうも、霜月です。一ヶ月ぶりにこの外伝を更新しました。」

朝日「本当に久しぶりだね。設定はちゃんと覚えているの？」

霜月「まあ、一応は。」

敷島「なんか頼りないですね。とりあえず時間かかってもいいから完結してくれないと困りますよ。」

霜月「善処します。とうかスコアが完成しないから更新がしばらく滞ると思うけどね。」

初瀬「もともと滞っているんじゃない？」

敷島「初瀬、それは言っではいけないのよ。」

霜月「ぐすん。僕だって忙しいんだ どうせみんなには吹奏楽のスコアを書く苦しみ分からないんだ」

朝日「あゝあ、作者いじけちゃった。まあいつか。じゃあ、出雲。次回予告をお願い。3、2、1、はい。」

出雲「はい、次はいよいよ日露開戦が近づいたということで富士さんと八島さんが呉に来ます。あと、ついに東郷平八郎が三笠に乗艦します。」

朝日「なんかつまないわね。じゃあ、罄手。締めをお願いっ！」

磐手「 本小説は血管収縮剤、塩酸テトラヒドロゾリンを配合
しています。」

初瀬「これって、東。ヲタとかニコ厨にしか分からないんじゃない
それでは、ご意見・感想お待ちしております。」

第三章「ロリコン、襲来」

三笠が日本に来てから約3ヶ月後の1903年の8月23日。

その日、呉に二隻の戦艦を含む艦隊が入港した。

帝國が配備した初の戦艦である『富士』と『八島』である。

彼女たちは今まで横須賀に配備されていたが、ロシアとの開戦が間近となったので、呉に配備されることとなったのである。

「うひゃーっ、呉は久しぶりだなあ！」

そう言つて露天艦橋から呉の街を眺める少女は『富士』の艦魂である。

髪型は活発そうな彼女に似合うショートカットで、その身体はスポーツをしているのかよく引き締まっている。

「もう、姉さん落ち着いてくださいよ。まるで子供ですよ。」

そんなはしゃぐ富士を諫めるのは、彼女の妹の八島である。

八島は富士とは対照的に女性らしい体つきをしており、彼女が纏っている雰囲気も含めると（髪が金色なのを覗けば）まさに大和撫子とでも言つべき艦魂である。

「いいんだよそんなこと。それより早く三笠つて子に会いたいな。」

「

「えっ、姉さんは見た事ないんですか？

三笠つてすごく可愛いんですよ。」

敷島は何度も撃沈されているらしいですしね。」

「いや、まあ敷島だしね。誰が妹になろうが気絶すると思うけど
というか、何で八島が三笠の顔を知ってるのよ。まだ彼女と会って
ないでしょ？」

「だってわたしファンクラブの会員ですもの。」

ほら、会員番号は幻の一桁ですよ。今では会員数は三桁ですからね。

「

そう言つて八島はどこからか会員証を取り出して富士に見せる。

「あ、ほんとだ　　って、いつの間に!？」

「ふふふ、これから戦を制するのは情報ですよ。」

八島は驚く姉に不敵に笑いながらそう答えた。

ちなみに、三笠のファンクラブは三笠が呉に来た次の日にできたもので、会員数は現在二百人を越えている。

これには連合艦隊の殆どの艦魂が入会しており、会員限定で三笠のブロマイドやグッズなども売られている。

もちろんこれは本人非公認であり、本人には存在すら知られていない。

ちなみに、なぜファンクラブが結成された呉ではなく、横須賀にいた八島が一桁の会員番号になっているのかは現在まで謎に包まれている。

さて、二人がそのような事を言っている間に『富士』と『八島』は呉に入港しようとしていた。

「おつ、そんな事言ってる間に呉に着いたよ！早く行かなきゃ！」

そう言つて富士は真つ先に『三笠』に転移してしまった。

「まったくもう、姉さんったらせつかちなんだから」

八島はそんな姉に呆れながら自分も三笠に向けて転移したのであった。

一方『三笠』の艦上では、呉にいる艦魂が富士と八島を迎えるために集合していた。

ちなみに敷島は三笠といると気絶しかねないので、目隠しをして側に初瀬が付き添っている。

「朝日姉さん、富士さんと八島さんってどういう人なの？」

三笠は初対面の時に敷島を撃沈した例のポーズで朝日にたずねる。

「（見ちゃだめだ、見ちゃだめだ、見ちゃだめだ）
えーっと、富士さんが活発な人で八島さんが落ち着いた人かな。」

朝日はなるべく三笠の方を見ないようにして言う。

「ふーん、そうなんだ。早く会ってみたいな。」

三笠はそう言つて遠くにいる『富士』と『八島』を見る。

その仕種一つ取つても可愛いらしく、離れた所から艦魂たちの嬌声が聞こえる。

（だっ、ダメよっ！あたしは三笠の姉なんだから　　）

（はうう、今日も三笠様は可愛いですう。）

（前が見えないわ。いったい何が起こってるのかしら？）

何やら心の声が聞こえるが、この際それらは無視しよう。

こうして、呉の艦魂たちが二人の到着を待っていると、彼女らの近くの空間が光り出す。

三笠は緊張しながらそれを見てみると、光がだんだん人型に収束していく。

そこから現れたのは帝國最古参の戦艦の艦魂である富士だった。

「敷島っ、久しぶりっ！」

「お久しぶりです、富士さん。」

敷島はそう答えて敬礼するが、目隠しをされているため、見当違いの方向にってしまう。

そんな敷島を見て皆が爆笑していると、八島が遅れてやってきた。

「ふう、姉さん早すぎるよ。あっ、みんな久しぶり。」

「八島さん、お久しぶりです。」

敷島は再び見当違いの方向に敬礼すると、周りの艦魂たちはさらに笑う。

敷島はその笑い声に何事かとキョロキョロする。

「お姉ちゃん、富士さんたちはこっちだよ。」

初瀬はそう言つて敷島を正しい方向に向ける。

敷島は自分のしでかした間違いに気付いて顔を真っ赤にしてうつむく。

「あゝ面白かつた。敷島は相変わらずドジっ娘だね。」

「どじっこ?」

敷島は富士が言つた聞きなれない言葉に首を傾げる。

「姉さん、彼女に余計な事を吹き込まないでくださいよ。」

「あはははっ」

「はあゝ、Ka。onネタはもういいから。さて　あなたが三笠ね?」

「はっ、はい。」

三笠がそう答えると、八島は三笠を上から下までまじまじと見つめる。

「あ、あの　」

「100点、100点、99点、98点、99点!」

「えっ、えっ?」

八島にいきなり点数をつけられた三笠は戸惑う。

「おめでとう、あなたは『ロリ魂協会』主催の『ロリ魂クール』に出場することが決定したわ！」

『ろりこんきょうかい！？』

その場にいる艦魂たちの声がハモる。

「三笠　　やっぱり標的にされたアルね。」

鎮遠は事情を知っているのか、苦笑しながら事の成り行きを見ている。

「『ロリ魂協会』はわたしが日本支部長を務めている『ロリイな艦魂をこよなく愛する協会』の略称で、文字通りロリイな艦魂を愛する子が集う会なの。」

本部はイギリスにあって今はマジエスティックが会長になっているわ。」

「何か胡散臭い組織ね。」

富士や敷島はジト目で八島を見つめる。

「何言ってるんですか、『ロリ艦魂協会』は胡散臭いどころか由緒ある組織ですよ。」

何せ、あの『ヴィクトリー』や『コンステイション』がモデルを務めたこともあるんですから。」

『ヴィクトリー』はイギリスの軍艦で、あのトラファルガーの海戦

でネルソン提督が座乗していた艦である。

『コンステイチュション』はアメリカの軍艦であり、米英戦争で大活躍をし、今なお現役の艦である。

両艦とも世界中の海軍で知らないものはいないほど有名な艦で、彼女らは各国の艦魂たちから見ればまさに神様のような存在であった。

「へえ、一応はちゃんとした組織なんですね。それで、『ろりこんくーる』ってというのは何ですか？」

朝日は先程から気になっていた事を尋ねる。

「『ロリ魂クール』はイギリスの『ロリ魂協会本部』が主宰する大会で十年に一回開かれて世界一のロリ艦魂を決める会よ。

たしか、今回で四十回目だから四百年ほど続いていることになるわね。

さらに

八島は得意げに『ロリ魂協会』と『ロリ魂クール』の歴史を語り始める。

彼女の説明は10分にもおよび、周りの艦魂たち（一部除く）にとつては拷問のような時間であったという。

《ロリコン、恐ろしい子》

それはこの場にいるほぼ全ての艦魂たちが等しく思ったことであつた。

「わっ、わたしなんかがそんな大きな大会に出てもいいんですか！？」

三笠が目を輝かせて八島に問いかける。
「どうやら、彼女は八島の説明を好意的に拡大解釈してしまったらしい。」

「みつ、三笠。やめた方がいいよ。八島さんが関わってるとろくなことがないから。」

初瀬が三笠の耳元で囁く。

「そうなの？」

「うん、わたしもそれで」

初瀬はそこまで言ったところで、誰かに肩を叩かれて後ろを振り向く。

そこには笑顔を顔に張り付けながらどす黒いオーラを放っている富士がいた。

「初瀬、後でわたしのところに来なさい。お仕置きしてあげるから。」

「ひうつ！ごっつ、ごめんなさいっ！」

「さあ、三笠。今すぐこの書類にサインを！」

八島が血走った目で三笠に書類を差し出す。

「いえっ、でもっ」

三笠は八島の迫力に思わず後ずさりしながら首を横に振る。

「ふふっ、ふふふふっ サインしないと どうなるか分かってるわよね？」

「えぐっ、えぐっ 」

三笠はもう目に涙を浮かべており、もう泣く寸前である。彼女があんな事言わなきゃよかった、と後悔したその時

「おい、八島。後輩をいじるのもその辺にしておけ。」

バコッ！

「痛ッ！ あれ、わたしは今何をしていたのかしら？」

頭を木刀で叩かれた八島は我に返ると、頭を抑えながら後ろを振り返った。

三笠はその隙に慌てて朝日の後ろに隠れる。

「まっ、松島さん！」

富士たちは慌てて敬礼をする。

松島と呼ばれた隻眼の艦魂は、それに対して綺麗な答礼で返す。

『松島』とは、日清戦争前に清国の巨大戦艦の『定遠』と『鎮遠』に対抗するために建造された艦で、主砲は32センチ砲を1門のみ装備しているという特異な巡洋艦である。

同型艦には『嚴島』と『橋立』があり、日本三景と同じ名前から三景艦と呼ばれ国民に親しまれている艦である。

彼女は日清戦争時の連合艦隊の旗艦で、まさに武人の鑑と言つべき艦魂であった。

「朝日、噂の新入りとやらはどれだ？」

松島はその鋭い眼光で辺りを威圧しながら朝日にたずねる。

「はっ、彼女が『三笠』の艦魂です。ほらっ、三笠。挨拶して。」

朝日は隠れていた三笠を前に出す。

「あっ、あのっ。わたしが最近着任した三笠です。えとっ、その、よろしくお願いしましゅっ！」

三笠は八島に対する恐怖と、憧れの初代連合艦隊旗艦に会ったことによる緊張で舌を嚙んでしまった。

『キュン！』

（かつ、可愛い　　はっ！）

「わっ、私は松島だ。貴様には期待しておるぞ。」

くしゃっ

「えっ？」

松島は少し顔を赤くしながら三笠の頭を軽く撫でる。

てつきり怒られるかと思っていた三笠は、驚いたように松島の顔を見る。

すると、松島はさらに顔を赤くして、三笠から顔を逸らした。

「あれえ？もしかして三笠に見ほれていたんですかあ？」

いい酒の肴ができた、と八島がニヤニヤしながら聞いてくる。

「うつ、うるさい！男ならともかく、女に惚れるわけがなかるう！」

凶星を突かれた松島はどもりながら反撃する。

だが、彼女は自ら墓穴を掘ってしまったことに気づいていない。

「へえ、男ならあるんですね？」

さらにニヤニヤしながら聞いてくる八島に、松島はしまった、と思ったがもう遅い。

「ばつ、馬鹿者っ！例えだ、例え！私が男を好きになるはずがない！」

「えっ、東郷君は違うんですか？」

東郷という名前を聞いて、松島の顔に動揺が見え始めた。

「ちっ違っに決まっておる！私はいつとはただの友人だ！」

松島がそう言うと、八島は一際どす黒く微笑んで爆弾を投下した。

「あれ、黄海海戦の直前に彼と抱き合ってたのは誰でしたっけえ？」

『えっ！！！』

途端に艦魂たちから黄色い悲鳴が上がる。

「!?! なっ、なぜ貴様がそのことを知っておる!」

さらに松島がそれを事実です、と認めるような発言をしたのが混乱に拍車をかけてしまった。

「ほえっ、松島さんって本当に東郷さんのことが好きだったんだ。

」

「あつ、そういえば、彼女ってゴニョゴニョ」

「キヤーツ! 松島さんって意外と乙女だったのね!」

艦魂たちはあちこちでこのような話題に花を咲かせ始める。

「だあー! うるさいうるさいうるさい! それは全部デマだー!」

松島は全身を真っ赤にして怒鳴るが、さらに騒ぎは大きくなっていく。

「きつ、貴様 よくも私の名誉を 殺すッ!」

完全にブチ切れた松島は刀を抜いて八島に襲い掛かる。

「おっと」

八島はまったく剣筋が見えないほど疾い松島の斬撃を軽々と避ける。松島は避けられたことは意にも介さずに次々と斬撃を放つ。だが、それらは全て八島に避けられてしまう。

さらに松島が斬撃を放つ

こうして二人の凶悪な鬼ごっこ（またの名をデスマッチという）は幕を開けたのであった。

「ねえ初瀬お姉ちゃん。松島さんってああいう人なの？」

三笠が鬼ごっこを続けている二人を見ながら初瀬に訪ねる。

「うーん、いつもはもっと怖い人なだけだね。」

「そうなんだ」

「まったくあの二人はいつもこうなんだから　ほらみんな！
さつさとパーティーの準備をするよ！」

朝日がそう提案すると、ほとんどの艦魂たちから賛成の声が上がる。こうして未だに鬼ごっこを続けている二人をよそに、艦魂たちはパーティーの準備に向かうのであった。

ちなみに、二人の鬼ごっこはそれから約二時間ほど続けられたが、八島がある条件を出したことにより平和裏に解決したのであった。

それから数日後、某所にて

金髪で刀を持った女性が、あたりを注意深く伺いながらある部屋に入ってゆく。

「おい、ちょっといいか。あんな　三笠のプロマイドが欲しいのだが」

「あらあら、この前たくさんあげたのにまた欲しくなったんですか。欲しいなら最初から欲しいと言って下さいよ。」

「ちっ、違うぞ！ただ他にはどういふのがあるか気になってだな
」

「はいはい分かりましたよ。じゃあ、どれがいいですか？」

と言って、売り手の女性は『三笠ブロマイド Vol.1』と書かれたフォルダを広げる。

中には三笠の隠し撮り写真がたくさん入っており、下の方に値段が書かれている。

「ふむ これにしよう。これはいくらなのか？」

「ほう、初めてにしては中々よいものを選びましたね。お代金は十銭（今でいう2千円くらい）ですよ。」

「うつ、少し高いな まあしょうがない。それと、このことは誰にも言つなよ。」

「分かってますよ。まったく 三笠の事が好きならそう言えばいいじゃないですか。」

「だっ、だから違うと申してるではないか！私は現代の艦魂の流行を知るといふ使命があるのでな 」

「ふう、まったく素直じゃないんですから。」

「聞こえておるぞ。ほう、貴様は死にたいのか？」

「ふうくん、じゃあもうブロマイドはいらないと」

「うぐっ　　すっ、すまない。また売ってくれぬか。」

「ええ、いくらでも。ふふっ、あなたはいいお客さんになりそうですから。」

「何か気にかかる言い方だが　　まあよい。くれぐれもこのことは内密にな。」

「分かってますって。」

「うむ、ではな。」

「またのご利用をお待ちしてます。」

第三章「ロリコン、襲来」（後書き）

霜月「どうも、霜月です っ、朝日さん物を投げないでくださいっ！」

朝日「更新遅すぎ。一月に一章って基地外じみた遅さじゃないの？」

初瀬「お姉ちゃん 漢字間違ってるよ。」

朝日「べっ、別にいいのよ。掲示板ではこっちのほうが正しいんだから。」

霜月「そっいえば漢字で思い出したけど、今年のセンターで『未曾有』の読み方が出たらしいね。」

朝日「もちろん読み方は『みぞうゆづ』でしょ？」

初瀬「お姉ちゃん それは『みぞう』だよ。」

霜月「 」

朝日「何で黙るのよ。」

霜月「いや、初瀬は大変だな〜と思って。」

朝日「ちょっと、それどついう意味よ！」

霜月「言葉どおりの意味ですよ。」

朝日「あんだだっ て数学は平均点以下のくせに！」

霜月「どうせ文系だし史学が取れるからちようどいいんですよ。」

初瀬「それはそれでよくないと思うんだけど」

朝日「ああもう！初瀬っ、次回予告しなさいっ！」

八島「次回はわたしと三笠が　　うふふっ」

初瀬「そうじゃないですよ　　次回はいよいよ物語の主人公が『ようやく』登場する予定です。」

鎮遠「ご意見・感想があつたら遠慮なく作者に送るアル。」

八島「この次もサービス、サービスう」

富士「ヲイ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、^{たんのう}堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9396f/>

カナタの幻想外伝 三笠の追憶～皇國ノ興廢此ノ一戦ニアリ～

2010年10月9日04時11分発行